

# 日本のオペラ2018

石田麻子

## 1. 日本のオペラ2018

2018年も引き続き、オペラの全幕・全曲上演の回数が減少した。一方で、セミ・ステージ形式、演奏会形式等での上演が一定数行われ、多様な形式ながら、多くの名演が生まれたことが我々の心にしっかりと刻まれている。こうした近年の状況を鑑み、巻頭の舞台写真集でもセミ・ステージ形式等の公演写真を複数とりあげた。歌手や指揮者、オーケストラ等の演奏家達が音楽面からオペラ上演をリードし、それぞれの個性を発揮したことで、日本での、音楽ジャンルとしてのオペラのあり方が確認される結果となったと言える。

海外からの招聘オペラ団体の公演回数は横ばいである。大規模な歌劇場の引越公演が行われて盛んにオペラのあり方を移入していた時代から、「巡回型」オペラ公演がパッケージ型の商品となって全国の文化会館等で公演を行っていた状況が、収束したことを示している。その契機となったのが、リーマンショックであり、東日本大震災でもあったことは象徴的である。オペラが、大型の公演形態だからこそ、そうした社会・経済の事柄の影響を受けやすいことを証明している。

そして今は、制作経験を身に付けた国内のオペラ団体や劇場による海外歌劇場等との国際共同制作や提携公演が、世界のオペラの創造活動に触れるための手段となっている。もちろん、演出家、指揮者、主要キャストを海外から招聘して個別に起用することも、世界の創造水準を知る重要な機会だ。

今後、日本で創造されるオペラ公演が、現代社会に対する問いかけと、今日的な公演の意義とをどのように見出すのか。世界のオペ

ラが見せる尖鋭性と大衆化とのせめぎ合いを通じた大きな創造活動のうねりの中で、日本の創造発信をどう行っていくのか。オペラを上演するという行為が、今日どのような意味をもつのか、大いに問われるようになっていえるだろう。

## 2. オペラ団体の制作

### 2-1. 大規模なオペラ団体の活動

ここでは、大規模な会員組織を形成し、かつ大型の公演を定期的に行っている団体を2つ取り上げる。

東京二期会が、《ローエングリン》《魔笛》《アルチーナ》《魔弾の射手》「プッチーニ三部作」《外套》《修道女アンジェリカ》《ジャンニ・スキッキ》、さらに《アイーダ》《後宮からの逃走》を上演した。

《ローエングリン》は新制作。深作健太の演出、準・メルクル指揮による東京都交響楽団による上演だった。《魔笛》は、2013年にリンツ州立歌劇場で上演された宮本亜門演出のプロダクションを、若手の川瀬賢太郎の指揮する神奈川フィルハーモニー管弦楽団で再演したもの。神奈川県民ホールが改修工事中のため、よこすか芸術劇場と相模女子大学グリーンホールで上演した。《アルチーナ》は、「二期会ニューウェーブ・オペラ劇場」と題し、3年に一回行われる若手歌手達による上演。鈴木秀美が指揮、めぐろパーシモンホールが会場となった。《魔弾の射手》は、久しぶりに日本に登場したペーター・コンヴィチュニーによる演出、指揮はアレホ・ペレス、読売日本交響楽団。既にDVDも販売されているハンブルク州立歌劇場のプロダクションを

基本とし、演出家が来日して新たに手を加えて、同劇場との国際共同制作として上演された。

「ブッチェニ三部作」公演は、初演の年からちょうど100年を記念してのものとなった。デンマーク王立歌劇場とアン・デア・ウィーン劇場との提携公演として、演出にダミアノ・ミキエレット、指揮にベルトラン・ド・ビリーを迎えた。新国立劇場で上演されたこのプロダクションは、二期会合唱団に加えて新国立劇場合唱団と藤原歌劇団合唱部を招いた、3つの団体による共同公演。今回は、この合唱起用における組織間協働がマネジメント上の特徴となり、オーケストラ・ピットには東京フィルハーモニー交響楽団が入った。

《アイーダ》は、「グランドオペラ共同制作」と題した国内各組織による大型の協働となった。ローマ歌劇場との提携公演によるもので、札幌の新劇場開場公演を皮切りに、神奈川、兵庫、大分で上演された。

《後宮からの逃走》は、公益財団法人ニッセイ文化振興財団との共催公演として、俳優の大和田伸也を太守セリム役に迎え、下野竜也指揮、東京交響楽団の演奏で上演された。

この他、コンチェルトンテとして《ノルマ》を公演したが、大村博美が2日続けて主役を務めるという極めて変則的な上演となった。

日本オペラ振興会の事業部の一つである藤原歌劇団は、《ナヴァラの娘》の日本初演と《道化師》、さらに《ラ・チェネレントラ》《ドン・ジョヴァンニ》を本公演として取り上げた。

《ナヴァラの娘》と《道化師》はマルコ・ガンディーニ演出による。東京と愛知で上演を行い、柴田真郁の指揮で東京公演は東京フィルハーモニー交響楽団が、愛知公演はセントラル愛知交響楽団が関わった。《ナヴァラの娘》での小林厚子、《道化師》での笹田博昭、砂川涼子等の好演が印象的だった。《ラ・チェ

ネレントラ》はフランチェスコ・ベッロット演出、園田隆一郎指揮による。東京公演はテアトロ・ジューリオ・シウワ・オーケストラ、大阪公演は日本センチュリー交響楽団がオーケストラ・ピットに入った。《ドン・ジョヴァンニ》は「NISSAY OPERA 2018 モーツァルト・シリーズ」、日生劇場の開場55周年記念公演として行われ、同劇場と藤原歌劇団の共催公演となったものである。さらに、同プロダクションを、藤原歌劇団の主催公演として、よこすか芸術劇場で上演。いずれも、東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団をジュゼッペ・サツヴァティーニが指揮した。

日本オペラ協会は團伊玖磨作曲の《夕鶴》を園田隆一郎指揮、岩田達宗演出で上演。同協会の郡愛子が総監督を務めた。東京では、東京フィルハーモニー交響楽団が、山形、秋田での上演には山形交響楽団が関わった。

これらの大規模なオペラ団体の上演は、各地の劇場を会場に、国内外で活動する演出家、指揮者が参加、さらに複数のオーケストラが関わる。オペラ上演が、その芸術形態の総合性を由来として、日本の各地域の芸術組織による創造活動を牽引する役割を果たしていることがよくわかる。

## 2-2. 地域におけるオペラ団体の活動

2018年は、関西歌劇団と関西二期会による公演が、吹田市メイ・シアターで予定されていた。ところが同年6月18日に起きた大阪府北部地震のため、メイ・シアター大ホールが当分の間、使用不能となり、この二団体の公演が中止を余儀なくされた。これらの公演とは別に、関西二期会は、12月にN.リムスキー＝コルサコフの《サルタン王の物語》を柴田真郁指揮、菅尾友演出により、兵庫県立芸術文化センター 阪急 中ホールで実施した。上演機会がなかなか得られない作品だ

が、簡素な中にも工夫された舞台セットと演出を得て、歌手達が大健闘、充実した公演となった。堺シティオペラは、小規模ながら《子どもと魔法》や松井和彦の《金の斧、銀の斧》を堺市内のホールで上演している。

東京オペラ・プロデュースは、日本初演作品や珍しい作品を継続的に取り上げてきた団体である。2018年はシャルバンティエ作曲《ルイズ》を新国立劇場中劇場で実施した。

藤沢市民オペラが、「藤沢市民オペラ2018-2020 シーズン 芸術監督 園田隆一郎 藤原歌劇団招聘公演」を実施。園田指揮による藤原歌劇団のプロダクション《椿姫》を公演、中村恵理の熱唱もあって、市民をはじめとする観客に広く優れた舞台を提供した。園田はこの年、藤沢市民オペラの芸術監督として2期目を開始、一步一步市民との協働を確かなものにしている。

この他にも関東圏では、江東オペラが《アンドレアシェニエ》、相模原シティオペラが《仮面舞踏会》、立川市民オペラの会が《椿姫》等、歌手が主催する活動や市民オペラ活動等が行われている。

さらに、各地域で大型の公演を行っている団体活動をみてみよう。

仙台オペラ協会が《修道女アンジェリカ》《カヴァレリア・ルスティカーナ》を東京エレクトロン宮城大ホールで、名古屋二期会が《ちゃんちき》を公演した。オペラ彩は、《トスカ》を和光市民文化センターで上演したのに加え、《泣いた赤鬼》の上演を前年に引き続き中小規模の会場で複数回行った。

札幌ではこの年、市内に建設された新劇場開場が大きな話題となり、大規模な国内共同制作公演が行われたことに加えて、これまで着実に活動を継続してきた団体公演が複数記録された。LC アルモーニカは、《ホフマン物語》を札幌市教育文化会館大ホールで、《おこんじょうり》《あまんじゃくとうりこひめ》

を同小ホールでそれぞれ上演した。札幌室内歌劇場が、《舞姫タイス》を札幌サンプラザで、北海道二期会は、《ヘンゼルとグレーテル》を札幌コンサートホール Kitara 小ホールで上演している。

愛知県では、(公財)日本オペラ振興会/藤原歌劇団が《ナヴァラの娘》《道化師》を、小澤征爾音楽塾オペラ・プロジェクトXVIが《ジャンニ・スキッキ》《子どもと魔法》を愛知県芸術劇場大ホールで上演した(同公演は他の会場でも実施)。同ホールが、2018年4月1日から約1年間の改修工事に入ったため、この間の大規模な招聘公演や先述の名古屋二期会公演は、日本特殊陶業市民会館フォレストホールで開催されている。地域での活動の活性化に、拠点となる会場の存在が重要な要素となっているのは確かなのだが、各地でそうした会場が、着実に改修や建替えの時期に来ている。

広島シティーオペラ推進委員会が《アイダ》、広島オペラアンサンブルがA. ボーイト《メフィストフェレ》、ひろしま国際オペラスタジオが《蝶々夫人》をJMSアステールプラザで上演。これら複数の団体が同ホールを活動拠点としていることが広島市の特徴である。この他にも、オペラ実行委員会ヴィータ◆ムジカーレ◆東広島が《椿姫》を東広島市内の大規模会場で上演、さくらびあ市民オペラが、《こうもり》を廿日市市で上演した。このように、広島県下では、複数のオペラ団体がコンスタントに上演活動をしている。これは、音楽大学の存在、拠点となる会館があること等、複数の理由が組み合わさった結果だと言ってよいだろう。隣の岡山県では、中国二期会が《こうもり》をセミ・ステージ形式ながら全幕上演して、設立45周年を祝った。

九州地区を見てみよう。福岡県では、西日本オペラ協会「コンセル・ピエール」が《ヘンゼルとグレーテル》、さらに鑑賞教室で泣

いた赤鬼》の公演を行った。また、北九州シティオペラが、トリエステ ヴェルディ歌劇場との共同制作による《ランメルモールのルチア》を北九州芸術劇場大ホールで上演している。熊本県では、熊本シティオペラ協会が《蝶々夫人》公演を実施した。

### 3. 劇場・音楽堂のオペラ制作

#### 3-1. 劇場・音楽堂のオペラ制作

新国立劇場は、飯守泰次郎オペラ芸術監督の最後のシーズンを終え、新オペラ芸術監督の大野和士が任期をスタートさせた。

2018年に行われた新制作は3作品。まず、細川俊夫作曲《松風》は、2011年にベルギーのモネ劇場で世界初演され、これまでに数多くの舞台上演を重ねてきた作品である。海外からの逆輸入の恰好で日本初演された。続いて、飯守監督指揮、カタリーナ・ワグナー演出による《フィデリオ》は、作品の特色である「救出オペラ」とならなかったことが議論を呼んだ。

大野監督の新シーズンを飾る《魔笛》は、2005年にモネ劇場で制作され、上演を重ねた実績のあるウィリアム・ケントリッジ演出舞台である。世界初演から時が経つ中で技術の革新もあって、映像面に大幅に手を加えた上演となった。

これ以外に上演された《こうもり》《 Hoffman 物語》《愛の妙薬》《アイダ》《トスカ》《カルメン》《ファルスタッフ》は、それぞれ同劇場で再演されてきたプロダクション。《アイダ》は、1998年のプレミエ以来、5年に一度のサイクルで再演されるというスタイルが続いていて、2018年も7回の公演が実施された。

日生劇場のオペラ公演は、若手歌手を中心にオーディションで起用、上演回数の多さもあって、人材の活動機会を確保する場となっている。《魔笛》は演出佐藤美晴、沼尻竜典の

指揮で、本拠地である日生劇場に加えて、その外の会場での公演も実施した。《ルサルカ》は前年に実施したプロダクションで、山田和樹の指揮と読売日本交響楽団の演奏により、静岡で行われた。《コジ・ファン・トゥッテ》は同劇場で、菅尾友演出、広上淳一指揮による読売日本交響楽団の演奏による上演となった。

東京文化会館は、「オペラBOX」《トスカ》を小ホールで上演した。これは、子どものためのワークショップ「オペラをつくろう」と連動してのもので、人材育成の側面も強く持っている。

びわ湖ホールは、「ニーベルングの指環」の新制作を継続、第一夜《ワルキューレ》をミヒャエル・ハンペの演出、芸術監督の沼尻竜典の指揮で実施した。第一夜の上演を終えたところで、長い道のりの中間地点を過ぎた。

《ヘンゼルとグレーテル》は栗山昌良自身による再演演出、《ドン・ジョヴァンニ》は、伊香修吾の演出によるもの。びわ湖ホール声楽アンサンブルのメンバーや、かつて在籍していたメンバーを中心に配役するのは、例年どおりだった。

兵庫県立芸術文化センターは、《魔弾の射手》。ほぼ同時に東京では東京二期会が、この作品を取り上げて、東西での上演が重なった。前年の関西二期会による同作品の上演から、3つのプロダクションが続いたことになる。

ひろしまオペラ・音楽推進委員会が、細川俊夫の《班女》を川瀬賢太郎指揮、岩田達宗演出で取り上げた。さらに、下野竜也指揮、同じく岩田達宗の演出により、「ひろしまオペラレネッサンス モーツァルトオペラシリーズ第2弾」として《イドメネオ》を上演、広島初演と謳われた同公演は、第16回三菱UFJ信託音楽賞「奨励賞」を受賞した。いずれも広島交響楽団がオーケストラ・ピットを務めている。

### 3-2. 劇場・音楽堂等の共同制作

劇場・音楽堂等のオペラ公演では、国内の劇場間共同制作が毎年大きな話題となる。特に大規模な会館同士の協働は、地域を超えて広範囲の鑑賞機会を生む。

2018年は、劇場・音楽堂等が主体となって実施した共同制作に、《アイダ》がある。団体別公演記録にも詳細を掲載しているように、(公財)神奈川芸術文化財団、(公財)札幌市芸術文化財団、兵庫県立芸術文化センター、(公財)大分県芸術文化スポーツ振興財団(iichiko総合文化センター)、(公財)東京二期会、(公財)札幌交響楽団、(公財)東京フィルハーモニー交響楽団により実施された。札幌文化芸術劇場 hitaru のこけら落とし公演という意味もあった。

ローマ歌劇場との提携公演による舞台は、各会場の大規模な舞台面に、比較的簡易な舞台美術による上演となった。ジュリオ・チャバッティの演出が舞台空間を埋められていたとは言い難いが、アンドレア・バッティストーニの指揮によるオーケストラ及び歌手達は音楽的に大いに健闘していた。札幌は札幌交響楽団、神奈川、兵庫、大分は東京フィルハーモニー交響楽団が演奏、バッティストーニの棒のもと、歌手やオーケストラが充実した響きを実現したことが特筆される。

この他のオペラ団体と劇場・音楽堂等の協働には、兵庫県立芸術文化センターと日本オペラ協会の共同プロダクションとなった《夕鶴》公演が挙げられる。

### 3-3. 劇場・音楽堂等による周年事業

例年、各会館の周年事業の機会に大規模なオペラ上演が行われるのも、オペラにおける祝祭性に由来する。

新国立劇場の開場20周年記念事業は、2018年7月まで続いた。日生劇場が開場55周年事業として、自主制作による《魔笛》の

他、一連の劇場内外での公演事業を実施した。広島県廿日市市さくらびあが、開館20周年記念事業で《こうもり》を上演した。オペラ彩の《トスカ》は、和光市民文化センターサンアゼリア開館25周年記念事業としても行われ、日生劇場の《ルサルカ》公演は、静岡市民文化会館開館40周年を記念してのものとなった。

## 4. その他の動き

### 4-1. 招聘公演、オペラを中心とした音楽祭やオーケストラの活動等

#### (招聘公演)

ベルリン・コーミッシェ・オーパーの《魔笛》は映像を多用し、世界中で大ヒットしている作品である。今回の日本公演では、普段とは異なる観客層を集め、3人の指揮者により、東京、兵庫、広島の3か所で上演が行われた。イタリア・バリー歌劇場はイタリアの劇場の持つ豊かなオペラの世界を、その音楽性を通じて示し、ローマ歌劇場は、同歌劇場復活の兆しを感じさせてくれた。ブルガリア国立歌劇場は、典型的な「巡回型公演」の興行形態をとりながら、複数の地域でオペラ公演の鑑賞機会を確保した。

このようにいくつか特徴的な公演が行われたが、海外歌劇場による大型の引越公演が、2018年の日本のオペラシーンを華々しく飾った状況だとは言い難い。

#### (音楽祭)

東京・春・音楽祭が2014年から取り組んできた「ニーベルングの指環」は、2017年に完結、2018年は《ローエングリン》により、ワーグナー作品上演を継続した。2018セイジ・オザワ松本フェスティバルで例年行われている子どものためのオペラでは、《ジャンニ・スキッキ》がとりあげられた。

現在の日本では、オペラを中心とした大規模なフェスティバルは、ほとんど行われてい

ないものの、各地域での音楽祭や文化祭では、特徴のある公演がいくつか実施されている。(公財)びわ湖芸術文化財団が、「近江の春 びわ湖クラシック音楽祭 2018 かがり火オペラ」として《デイドとエネアス》を野外上演した。天候に左右される野外上演はリスクを伴うが、祝祭をオペラで実現する試みとなった。

加えて演奏会形式等ながら、バロック・オペラに取り組んでもいる。新・福岡古楽音楽祭実行委員会では《オルフェオ》全曲上演が行われ、さらに北とぴあ国際音楽祭 2018 で《ウリッセの帰還》が上演された。いずれも指揮者に寺神戸亮を迎えてのもので、日本におけるバロック演奏の水準を示した。

#### (オーケストラの取組み)

(公財)東京交響楽団は、主催公演の中で、演奏会形式によるオペラ作品を取り上げている。2018 年は、飯森範親の指揮で U. ツィンマーマンの《白いバラ》を日本初演した。

オーケストラ・アンサンブル金沢が、マルク・ミンコフスキの音楽監督就任記念で《ペレアスとメリザンド》を石川県立音楽堂コンサートホールで定期公演として全幕上演して成果をあげている。その後、東京オペラシティコンサートホールでセミ・ステージ形式により再演した。

東京フィルハーモニー交響楽団が、チョン・ミョンフンとの《フィデリオ》、アンドレア・バッティストーニとの《メフィストフェレ》で快演を聴かせた。いずれも、オーケストラが良く反応して、それぞれの指揮者の個性を十分に発揮した公演となった。

この他にも、東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団が、高関健指揮で《スペインの時》を演奏会形式で、ロシア・ナショナル管弦楽団が、ミハイル・プレトニョフ指揮で《イオランタ》を演奏会形式で公演した。

こうしたオーケストラによる取組みは、オ

ペラ作品の鑑賞体験の機会を確実に広げられている。

#### 4-2. 新たな創作の潮流

新国立劇場での細川俊夫作曲の《松風》は、過去に海外で何度も上演されているので、日本初演とはいえ、新たな創作という範疇からは若干外れるかもしれない。それにしても、海外の新作オペラ上演の新鮮さと先進性を十分に見せてくれた。宮崎県オペラ協会による佐橋俊彦作曲《赤毛のアン》、松江ブラバ少年少女合唱隊による竹内一樹作曲《夢の庭》、揖斐川町文化協会主催の森三恵子作曲《美越の池の龍一夜ヌケ池伝説による一》が、大規模会場での世界初演作品となっている。このうち、《赤毛のアン》は、第17回三菱UFJ信託音楽賞「奨励賞」を受賞した。

以下は、演奏会形式等による上演である。サントリーホール主催のサントリーホールサマーフェスティバルでの野平一郎《亡命》は世界初演作品。野平自身の指揮により、声楽のソリストのみならず、器楽奏者にも人材を揃えて上演が行われ、豊かな音楽性が如何なく発揮された。東京芸術劇場コンサートオペラ vol.6 での藤倉大《ソラリス》は、2015 年にパリ・シャンゼリゼ劇場、リール・オペラ座やローザンヌ歌劇場による劇場間の共同制作により既に世界初演されている作品で、今回が日本初演となった。東京芸術劇場コンサートホールの大きな空間に、藤倉が得意とする新たな音響と照明設計による創造が実現。劇場空間の再構成に成功した。

#### 4-3. 人材育成の機会と若手の活動

新国立劇場オペラ研修所の公演として、《イル・カンピエッロ》が中劇場で上演された。これは、第18～20期生までの研修生がソリストを務めたのに加えて、国立音楽大学、昭和音楽大学、桐朋学園大学、武蔵野音

楽大学の学生達が合唱で参加した。

びわ湖ホール声楽アンサンブルによる事業も、若手ソリストを育成する貴重な機会となっている。演出の栗山昌良が、《ヘンゼルとグレーテル》をびわ湖ホール声楽アンサンブル所属の歌手で上演し、伊香修吾演出の《ドン・ジョヴァンニ》にも、同じく声楽アンサンブル、および同アンサンブルの卒業生達がキャスティングされた。このように、アンサンブルに所属した歌手達が、育成期間終了後も大小様々な出演機会を得ていることが特徴である。2015年度から小山由美によるドイツ歌曲研修も公開で行われていて、2018年も継続された。同ホールの育成事業としては、この他にも「沼尻竜典オペラ指揮者セミナーⅣ～『蝶々夫人』指揮法～若手指揮者のワークショップ」を実施している。

若手の登竜門となるコンクールも各地で行われた。東京音楽コンクール声楽部門は、第1位をカザフスタン出身の歌手が獲得、第2位に小堀勇介、種谷典子が入賞した。同コンクールは、入賞者に様々な主催公演への出演機会を提供し続けることが特色となっている。

五島記念文化賞は一般的なコンクールとは一線を画すものの、受賞者は海外研修の機会を得ることができる。2018年はオペラ公演の指揮を中心に実績をあげつつある田中祐子、ソプラノの今野沙知恵が選ばれた。

文化庁の在外研修は、1年に歌手6名、2年に歌手1名がイタリア、スイス、アメリカ合衆国等、各国に派遣されている。

大学オペラ公演も各地の芸術系大学で開催された。愛知県立芸術大学は、知立市文化会館（パティオ池鯉鮒）かきつばたホールや長久手市文化の家 森のホールで《シンデレラ》を公演した。この他に以下の大学は、学内設置のオペラ劇場やコンサートホール等で大小様々な公演を実施、人材育成の場として、さ

らに地域の上演拠点としてのあり方を示している。大阪音楽大学と国立音楽大学、東京音楽大学は、それぞれ《コジ・ファン・トゥッテ》を、東京藝術大学は、《魔笛》を上演した。同志社女子大学、洗足学園音楽大学は《フィガロの結婚》を上演、モーツァルト作品に取り組む各大学の姿勢がみられる。昭和音楽大学は、上海音楽学院、ソウル市立大学校、ソウル国立大学校の学生達の参加による交流プロジェクトとして《ファルスタッフ》を上演している。

日生劇場が高校生を招待して鑑賞機会を設定する「ニッセイ名作シリーズ」、新国立劇場の「高校生のためのオペラ鑑賞教室」は、東京と関西での公演が行われ、高校生達がオペラ公演に触れる場を提供した。

## 5. オペラ制作を取り巻く環境

### 5-1. 助成構造

#### （オペラ団体への助成）

大規模なオペラ公演には開催を支える公的助成、民間寄付等が欠かせない。芸術水準や観客の確保が実現したとしても、安定した財政基盤が見込めなければ即座に危ういものになってゆく。以下で、2018年に行われた公的助成を対象別に整理してみたい。

文化庁・文化芸術振興費補助金「舞台芸術創造活動活性化事業」のうち、オペラ団体で「年間団体支援」を受けて本公演を実施したのは、東京二期会、日本オペラ振興会である。さらに「舞台芸術創造活動活性化事業」の「公演事業支援」枠では、オペラシアターこんにゃく座の《天国と地獄》《イヌの仇討あるいは吉良の決断》、関西二期会《サルタン王の物語》、東京オペラ・プロデュース《ルイーーズ》、名古屋二期会《ちゃんちき》、さらに声楽アンサンブルを擁するびわ湖ホールの《ヘンゼルとグレーテル》《ドン・ジョヴァンニ》が対象となった。さらに、（公財）石川県

音楽文化振興事業団（オーケストラ・アンサンブル金沢）は、オーケストラの定期公演で《ペレアスとメリザンド》を取り上げたため、石川県立音楽堂での同公演が対象事業となっている。

「芸術文化振興基金助成事業」のうち最も助成額の大きい「現代舞台芸術創造普及活動」でも、複数のオペラ公演が助成対象となった。音楽分野で、北九州シティオペラ《ランメルモールのルチア》、仙台オペラ協会《修道女アンジェリカ》《カヴァレリア・ルスティカーナ》、中国二期会《こうもり》（セミ・ステージ形式）、日本ヘンデル協会《アリオダンテ》等、地域のオペラ団体活動に助成されている。この他、「2018 セイジ・オザワ 松本フェスティバル」の《ジャンニ・スキッキ》、ニッセイ文化振興財団《魔笛》と《コジ・ファン・トゥッテ》が同助成を受けた。

「芸術文化振興基金助成事業」の「アマチュア等の文化団体活動」枠での助成を受けた団体公演もいくつか行われ、弘前オペラの《愛の妙薬》等が大規模会場で上演されている。

上記は、日本芸術文化振興会を通じて、各団体に配分されている助成金である。この他に文化庁の各種事業から、オペラ公演に行われた助成をまとめてみよう。

「戦略的芸術文化創造推進事業」では、東京二期会の《魔弾の射手》に助成が行われた。日本語に加えて、英語字幕の設定、プログラムへの英文表記等の工夫がなされ、日本語以外を母語とする観客に配慮したものとなった。日本オペラ協会の《夕鶴》も山形、秋田公演が対象となった。さらに、「文化芸術による子供の育成事業—巡回公演事業—〈ミュージカル公演〉」では、オペラシアターこんにゃく座《口はロボットの口》と《森は生きている》の巡回公演が対象となった。同事業〈音楽劇公演〉の枠で、藤原歌劇団の《助けて、助けて、宇宙人がやって来た！》、東京オペレッ

タ劇場の《小鳥売り》、ミラマーレ・オペラの《てかがみ》（ハイライト公演）が、同事業〈合唱公演〉で《あまんじゃくとうりこひめ》が東京合唱協会により、行われた。団体が威信をかけて行う本公演に加えて、こうした課題解決型公演を担うのも各団体の活動だと言える。

#### （劇場・音楽堂等への助成）

平成29年度文化庁「劇場・音楽堂等活性化事業」、そして平成30年度からの「劇場・音楽堂等機能強化推進事業」では、地域の中核となる各館の主催事業が助成されている。この枠組みには、[総合支援事業] [地域の中核劇場・音楽堂等活性化事業] [共同制作支援事業] [劇場・音楽堂等間ネットワーク強化事業] の4つのスキームが用意されていて、助成事業の主旨に合致した各公演が採択された。このうち、大型の公演事業を行っている各劇場・音楽堂等の活動は、[総合支援事業] や [地域の中核劇場・音楽堂等活性化事業] の枠組みでの助成を受け、兵庫県立芸術文化センター《魔弾の射手》、びわ湖ホール《ワルキューレ》《デイドとエネアス》、東京文化会館《トスカ》、愛知県芸術劇場《パティスアンとパティスエンス》の他、足利市民会館《蝶々夫人》等が実施された。

[共同制作支援事業] で、札幌、神奈川、兵庫、大分の各館協働による《アイダ》が助成され、[劇場・音楽堂等間ネットワーク強化事業] で、日生劇場《魔笛》の各地域での公演が、さらにオペラシアターこんにゃく座《森は生きている》が行われた。

他にも、文化庁からの直接助成事業は複数行われており、そのうちの一つ、文化庁「文化芸術創造拠点形成事業」で新国立劇場の《トスカ》がびわ湖ホール20周年記念事業として実施された。さらに、「新国立劇場 高校生のためのオペラ鑑賞教室・関西公演」《魔笛》が同事業で開催された。

「芸術文化振興基金助成事業」の「地域文化施設公演・展示活動：文化会館公演」で、第27回みつなかオペラ《トスカ》等、複数の地域での組織の活動が採択助成されている。大阪音楽大学の第54回オペラ公演《テレフォン》《泥棒とオールドミス》の公演はこの枠組みでの実施となった。

## 5-2. 舞台芸術政策の新たな展開

2018年度から「文化芸術推進基本計画（第1期）」が開始。文化芸術基本法に基づいて文化芸術を推進するための同基本計画では、数値計画が具体的に掲げられたことに大きな特徴がある。その計画の達成度を測定する作業はこれからのことになる。

助成事業に関しては平成30年度に大きな変化があった。平成29年度まで文化庁からの直接補助となっていた「劇場・音楽堂等活性化事業」が、(独)日本芸術文化振興会に移管されて、名称も「劇場・音楽堂等機能強化推進事業」へと新しくなったのである。さらに、「国際芸術交流支援事業」も、平成31年度募集（募集開始は平成30年9月）から移管された。こうして、団体のみならず劇場・音楽堂等への大型補助事業が同振興会の管轄となった。担当部署である基金部が実施するようになった。これは、日本においてアームズ・レングスの原則が実現されていく過程の一環だと言ってよいであろう。

今後、日本芸術文化振興会の体制強化が行われれば、日本でのアーツカウンシル制度の一層の整備へとつながることになる。ただし、制度づくりには、助成制度の設計、整備と共に、助成に携わる人材強化が不可欠となっていることも事実である。これは一日にして成るものではないことを我々は心しなければならない。

舞台芸術政策に関連する調査や研究の必要性も強調されるべきであろう。

日本における助成制度の整備に向け、具体的な制度運用を明らかにするために、先行するイングランドとスコットランドのアーツカウンシル制度の実態に関する調査研究成果が平成30年9月に発表された。

「イングランド及びスコットランドにおける文化芸術活動に対する助成システム等に関する実態調査」は、昭和音楽大学舞台芸術政策研究所（学校法人東成学園）が日本芸術文化振興会から委託を受けて実施したものである。同調査において、イングランドとスコットランドの公的助成機関について、政府との関係、制度、審査、体制等の詳細が明らかになった。加えてアーツカウンシル・イングランドに配置された、リレーションシップ・マネージャーと名付けられた人材の仕事が詳しく報告されたことが大きな特徴である。彼らは、助成制度の現場を担い、直接団体との関係構築を行う立場にある。同報告書では、望まれる人材像や実際の配置、その職掌範囲等が明らかにされた。審査に関わり、採択後のリスク管理も行う彼らは、助成制度運用のプロフェッショナルとして「T字型人材」へと育ってゆく。そして、助成先である芸術団体等でディレクター等となる将来的なキャリア・パスも選択肢として持ちながら、芸術創造を支える立場を継続的に担う。その存在が、実際にアームズ・レングスの原則を実現する中心的な役割を果たしていること等、詳細な報告が行われている。

同時に、英国政府が50年ぶりに発表した『カルチャー・ホワイト・ペーパー』の全訳、アーツカウンシル・イングランドの『10年戦略』、クリエイティブ・スコットランドの『10年計画』も、それぞれ全訳を掲載しており、政策研究の基礎資料として活用できるようになった。

同調査報告書は公式ウェブサイトで公表されている。

「日本芸術文化振興会 調査研究等」

<https://www.ntj.jac.go.jp/kikin/artscouncil/research/2583.html>

舞台芸術をはじめとする文化政策研究は、基礎資料の精度を上げ、創造活動の現場へのまなざしも忘れることなく積み重ねていくことが肝要となる。本年鑑もそのような役割を担っていると認識している。

## 6. まとめ

実演芸術の中で最も大規模な上演形態の一つであるオペラ公演が、社会構造の変化、経済、政治等からの影響を直接受けるのは世界共通の現象である。日本においても例外ではない。そして、制作、製作、政策の3拍子の足並みが揃い、支え合うことが、オペラ公演の成功条件でもある。何よりもその芸術性の確保には、目利きのプロデューサーの存在が不可欠となる。また、演出、美術、音楽の3要素が高い調和を生むことがオペラの醍醐味であることは疑う余地がない。そうした公演機会を確保するためにも、それぞれの立場で

力を尽くす人材の役割が重要となる。

世界的な傾向として、国際共同制作や巡回公演等、地域を変えて行われる公演は、個人や各団体の努力や個性だけで成立する状況ではなくなってきており、各館で活動する人材が具体的に情報交換する場をまとめるプラットフォームがリーダーシップを発揮している。オペラ・ヨーロッパ、オペラ・アメリカといった組織の役割は、今や実質的なものとなった。

また、大道具に代わって映像化が進み、舞台の可動性が高まる中、演出や映像に才能を得たプロダクションが各国で受け入れられている。結果として生まれるグローバル化の波は、地域性、国の文化を代表する劇場や団体の個性を凌駕しつつある。それを鑑賞する観客達の目も耳も肥え、経験値は増す一方だ。しかし、オペラを身近なものとして、カジュアルに楽しめるように扉を広く開けておくことも重要となる。そうした世界の状況に日本のオペラ創造がどう伍していくのだろうか。大きな問いが投げかけられている。